

今も続いている薬草とのお付き合い

三浦 博史 (昭33)

7月末に急病で入院、沖縄でのクラス会（11月8日～10日）への出席はとても無理だろうと、しぶしぶ予約をキャンセルすることにしました。ところが、その後、思いのほか快復が順調で、有難いことに10月にはほぼ元どおりの普通の生活に戻ることができました。となると、待ちに待っていたことがあります。それは、花を楽しみながらの長崎周辺の山歩きです。好きな植物を眺めながらだと、単独での山歩きも淋しくないし、少々歩いても不思議なほど疲れを感じません。植物と付き合い合えば付き合い合うほど、好きになれば好きになるほど、深く知れば知るほど、野山の植物は私に強い摩訶不思議な力「気」を送ってくれます。この「気」が、気力だけでなく、衰えた体力までもしっかりカバーしてくれるのですから、私にはなくてはならない薬籠中の秘伝薬のようなものです。

4年の卒論の教室は衛生、専攻科と助手時代は生薬、助教時代は放射薬品、長大退職後は有明高専物質工学科と分野は変わりましたが、専門として選ぶとすればやはり生薬。当時、生薬には高取治助先生、河野信助先生、大橋裕先生が居られました。直接の指導教官である河野先生は山が大好きで、学生と一緒にキャンプにも行きました。実験材料の植物集めでも野山をよく歩いていたし、山好きが醸成されて当然の環境でした。でも当時は植物の名前はそれほど知らず、本格的に名前を覚えるようになったのは、何が切っ掛けだったか忘れましたが、自然保護運動に係わるようになってからだと思います。昭和47年に「長崎県の自然を守る会」が結成され、初代会長が植物分類学で著名な長大名誉教授の外山三郎先生でした。常任理事には、植物関係では植物生態学が専門の伊藤秀三先生が、山岳会関係では長崎県山岳連盟の役員が居られました。私もメンバーの一員でした。この活動の中で、長崎勤労者山岳連盟（労山）とも深い繋がりができました。数年後「守る会」は解散しましたが、今でも労山の仲間との付き合いは続いており、山仲間との交流、山での経験は植

物調査に大いに役立っています。図鑑で調べてもわからない場合、植物を持ってよく外山先生のお宅に伺ったものです。先生はわざわざ植物図鑑を出してこられ、見比べながらきちんと再確認した上で植物名を教えて下さったのには頭が下がりました。薬草関係では、「長崎の薬草」などの著者である高橋貞夫先生からも薬草観察会で民間薬となる多くの薬草を教えて貰いました。薬学教育で学ぶ薬用植物といえ、漢方薬で使われる植物が中心ですから、民間薬として使う薬草となると独学で学ぶしかありません。しかも、普通見かける大抵の野外植物が民間薬として使われており、民間薬となる薬用植物（有毒植物もあわせて知っておく必要がある）の名前を憶えるだけでも大変です。

長いこと薬用植物観察会の講師をして下さった高橋先生の後を継いで、昭和61年の第二回市民健康フェスティバル（現在のふれあいフェスタ）から、毎年、市薬主催の薬用植物観察会で私が説明役を務めるようになりました（雨天ならば中止）。今年は「2004ふれあいフェスタ」のプレイベントとして薬用植物観察会が彦山で行われました。参加者は約50名。長薬出身では、クラスメートの西協同窓会長、山中薬局の山中国暉・みちよさんご夫妻（昭43）、中村博市薬会長（昭45）ほか数名が参加されました。勿論他薬出身の薬剤師さんも多数参加されています。

健康志向、自然食品、健康食品ブームの中で民間薬に興味を持つ人が増えています。

薬剤師にとって民間薬の知識は専門外、自分たちの責任で利用すればよいで済むものでしょうか。民間薬は民間薬としての良さを持っています。また、民間薬への興味を漢方薬への関心へと向けることもできます。たかが民間薬と馬鹿にはできません。

長崎には身近に気軽に登れる山があって有難いですね。それに熊に襲われる心配もありません。植物の名前が分かるだけでぐっと親しみがわき、花、薬草、山菜を求めて野山を散策するのが一層

楽しくなります。薬剤師さんの中で観察会の指導
ができる人が大勢育ってくれることを願っていま

す。歳、体力を考えると私もいつまで続けられる
かわかりませんし。

昭和34年卒業生同窓会「三葉会」に参加して

神原 正 (昭34)

今年（平成16年度）の同窓会は4月24～25日、
一泊二日の日程で岩国（錦帯橋）、宮島（厳島神社）
の2ヵ所の観光地で開催されました。参加者も多
く（21名）、2日間とも好天に恵まれた大変楽しい
旅行となりました。

1日目は、新しく掛け替えられた錦帯橋・岩国
城・燕返しの佐々木小次郎等見どころいっぱい
でした。夜のホテルでの宴会では、2回目の参加と
なりました私は新人ということで最上席に座らせ
ていただき少々うれ気味でしたが、卒業後45年振
りとは思えないくらい元気で若々しい皆様の顔
を見せていただき感激致しました。

2次会は部屋で夜おそくまで会話が弾み賑やか
でした。

2日目は宮島観光で皆さん元気にしっかり
ウォーキングしてきっとよい運動になったと思
います。昼食は名物「あなご飯」を食し、フェリー
で本土に渡り午後1時半解散となりました。なか
なか参加出来なかった私の為に地元で同窓会を開
催していただき、遠方から来ていただいた皆様に
感謝しますとともに、次回も全員にお会い出来
ます様に皆様の健康を願いつつ私の感想文を終わ
らせていただきます。



「近況…昨今思うこと」

伊藤由紀子（昭36）

昨年、長い間勤めた調剤薬局を退職し、薬の業界と縁が薄くなった。責任感から解放され、ゆっくりした時間が過ぎている。

薬学部入学は、女性でも技術を身につければ将来役立つのではないかと進んだ道であった。お陰で私の人生の大半を薬剤師として歩んだ。入学当初からいわれていた薬剤師の悲願「医薬分業」も徐々に軌道にのり、分業の発展を我が身を持って体験した。長い道のりだった。思い出は山程あるが、仕事は勿論、家事育児と周囲の助けがあったればこそ今を迎えられたと感謝している。

さて、今回は仕事を持つ女性の子育てについて、私の感じた事を書きたいと思う。私たち女性薬剤師は、専門職故昔からこの問題に直面してきた。今よりもっと社会的なサポートは少なかった。家庭か仕事か更に育児か仕事か選択を迫られた人も多かったと思う。併し周囲の環境に恵まれ、子供を立派に育て、充実した立派な仕事をされた方も大勢いらっしゃる筈である。

現在、多くの女性が社会に進出し、男性と肩を並べ活躍している様は、隔世の感がする一方、女性ならではの難題に直面しているのを身を持って感じている。身近な例で申し訳ないが、私には2人の娘がいる。男女雇用均等法施行後、総合職として就職し都会で暮らし始めた。結婚して子供が出来るまで、順調に仕事をして来た。併し出産後、復職して事情が変わった。新たに子育てという仕事に加わったのである。つれあいも仕事と家事の両立を支えるため協力を惜しまない。子供を保育園に預け、まず直面したのが予期しない子供の病気である。保育で預ってくれない。保育中の病気は呼び出されるし幼いので入院することもある。

たちまち有給休暇はなくなってしまう。年令的に責任のある仕事もまかされる様になった。当然、残業、出張、泊りこみの研修等も出てくる。育児と重なるとこれも負担になる。ベビーシッター等随時雇っても都会に親がいない若い夫婦には荷が重い。何度双方の親がかけてくれたことか。他人が見れば当たり前かも知れないが、その度に、行政その他のサポートを望んだものだ。だが子供が小さい内はまだ良い。学齢期になると又状況が変わる。学童保育も3年生までとかまた環境も余り芳しくない。更に子供の先を見すえた教育も必要となり、女親が仕事を持つのは限界かなと私には思えてくる。都会に住む友人たちは、共働きの子供夫婦のために孫の面倒を見に日参しているという。

とに角、周囲のサポートがなければ女性は子育てしながらの納得のゆく仕事は無理かも知れない。娘たちの姿を見ながら痛感している。今、政府が少子化の原因をさぐり、対策を練っている様だが、まだまだ実感として娘たちは恩恵を受けてない様に思える。身近な人たちのサポートを社会的なより具体的なサポートに変えていかなければ、女性は安心して子供を産み育てていく事は出来ないと思う。今政府が考えている男女共同参画社会など理想的だが、子育て中の女性が男性と平等に参加出来る人はどれ程だろうか。所詮、絵にかいた餅の感がする。長い目でそんな社会の到来を待つしかないのである。

それでも娘たちは、自分のため、家族のため子育てをしながら、社会の一員として働いている。私も時間はたっぷりある。声がかかれば、孫と遊ぶのを楽しみに機上の人となるのである。もっと女性が働きやすい世の中をと念じながら……。

37年クラス会たより

荒木 弘章 (昭37)

昨年の福岡に引き続き、本年は、10月23日歴史の都奈良で開催しました。台風襲来に心配しながらも、遠く南は沖繩(喜納さん)、北は埼玉(中西君)を含め、24名の多くの仲間が集まりました。

当日、早めに参集した者10数名は、早速、薬剤師であるからにはと、薬師寺へ。薬師如来、月光・月光菩薩の穏やかなお姿、天平の姿を偲ばせる東塔、光り輝く西塔の外、ラッキーにも開帳されていた平山画伯の30年間の大作：玄奘三蔵の壁絵を鑑賞した。敵そかな唐西域に胸打たれる一方、アルカイードによるパーミアン石窟大仏の破壊を恨む。

更に、今、売り出しの奈良街を徘徊、アチコチに開館している街の博物館を覗き込んで、歴史を垣間見た。その中には、150年も続いた薬局で、お茶の接待に一息、木製の薬研を発見し、ビックリ等々。

夜、いよいよ宴会。久し振りの再会、お互いに、それなりの生き様が見られる。静岡と佐賀を股に掛ける香田君、相変わらず波瀾万丈の池田君、FPとして年金問題を突く坂田君、ギャラリーまで作り楽しむ秋田さん、工場勤務からUターンの早崎君、プロパーから薬局勤務へ転職・悠々自適の退職者・親の介護に励む者等々、それぞれの近況を聴かせて貰い、大盛会であった。

その勢いを、そのまま、二次会へ。又、ロマン

チストの女性軍は、ライトアップされ、幻想的な奈良公園猿沢の池付近を回った後、再合流、居酒屋で秀阪さん差し入れの下関フグを肴に、焼酎飲み飲み飲み、深夜まで話は続いた。名残惜しいものの日替わりの時間も迫り、来年の鹿児島での再会を祈念し、散会となった。

翌朝は、体力にモノを言わせて、本年世界遺産に指定された熊野古道を目指す女性軍を見送る。熊野三社巡りを楽しみ、新宮泊まりで、来るべき将来を期して、おしゃべりに花を咲かせたようだ。残された男性軍の中には、羨んで、同行を願う者もいたが、さて、来年はどうなるか。男性軍は、希望者10人ばかりで、秋色いっぱい奈良公園の東大寺、春日大社、興福寺を巡り、それぞれ帰途についた。

今回の同窓会は、関西在住の林、高井、中山、松崎、荒木の5名が幹事を務めた。数度のコミュニケーションを含めた準備で、参加者の満足を得られたものと自画自賛。

最後に、特に、今回の同窓会は、忘れる事が出来ない思い出になってしまいました。と言うのも、二次会の真っ最中にTVで、中越地震が起きた事を知った。余りの悲惨さに、ビックリした一方、優太君の偉大な生命力の強さに、勇気を貰った感じがします。人生、何があるか解らないが、決して、諦める事はない。



37年長大薬学部卒同窓会 2004年10月23日 於奈良

昭和38年卒 卒後41年同窓会 報告

土田 拓生 (昭38)

同期の仲間40名が卒業して今年41年経つ。学生として過ごした4年間に対してその10倍の年月を経たことになるが、短く且つ遠い彼方にあるはずの4年間の印象は何と強烈であろうか。もう何度となく集まっている同窓会でも未だに当時の新しい事実や忘れられていた事柄が掘り起こされて賑わうことがある。前回の同窓会は2年前に丁度おくんちの時期に長崎に集まり、一度も足を踏み入れたことがなかった“花月”を利用するという豪華版であったが、今回は関西で11月19日(金)と20日(土)に開催することになった。毎回場所選びは悩ましいが、今回は中野英昭君が何度か利用経験を持つ京都の中心から少し離れた厚生年金施設“ウエルサンピア京都”を利用することになった。ここは学研都市京田辺市の小高い丘の上であり、周辺には山や林が広がって敷地内にスポーツやレジャー施設も持つリゾートホテルである。

初日19日(金)は午後4時30分に集合(男性13名、女性11名、計24名)し風呂などで一服した後、6時から大広間で中野英昭君の司会により同窓宴会を始めた。

まずは出席者の再会を祝し久保多都子君のにぎやかな発声で乾杯した。これは彼女(旧姓今井)が学生時代の名簿のいの一歩であったことと明るいキャラクターであること、それにクラスの男女構成の数だけでなく力関係も勘案してのことであった。

開会の挨拶は何ら気苦労や細やかな配慮、素振りを表に見せず走り回って準備万端、我々は感謝感謝の小倉敏弘君の口上で一気に学生仲間の雰囲気となった。

なごやかな雰囲気の中、各人の近況報告はそれぞれの暮らしぶりが披露され興味つきないが、お互いの励みになることが多い。年齢が60を越して仕事から離れたこと、第2第3の仕事に取り組んでいること、年金生活を始めたこと、趣味を楽しんでいることなどであるが、健康への留意の意識が強くそれぞれに元気である。

年齢柄からか今回の共通の話題は“こける”であろうか。段差もないのにつんのめる、信号が青になり歩き出したらバツリこけて恥ずかしかった、何でもない所でこけて左手骨折。極めつけは会社を早期退職してアーチェリーに打ち込んでいた白石浩彦君である。前回の同窓会の話では、アテネオリンピックのメダリスト山本に勝ったこともあり国際大会を目指しているはずであった。今回も日焼けした顔でスポーツ然として出席しており、次の北京オリンピックに向けた意気込みを聞けるものと期待していた。

「どうだ、その後の活動ぶりは？」

「アーチェリーのことか？ あれはもうやめた」

「なんだ、もうあきらめたのか」

「(下をむいて) うん、やめた。この前、高校生の大会で審判をしていて矢が放たれたら審判は走るんだけど、その時下に引いてあるロープに引っかかってこけるんだよ。女の高校生の前ではずかしいよ。だからやめた」

「そうか、そりゃもうそういう年だもんな」

「そうだな、だから今度はマウンテンバイクにしたよ」

「……(一瞬静かになる)。あれはきついよ。もうやめたら」

「いや、きのう注文品が届いたよ。慣れるまで最初は尻が痛くなるそうだ」

「……(尻だけですむかな)」

次回が楽しみである。

少し変わったことで話題になったのは青木郁君が長楽同窓会 福岡支部(浦陵会)の会長に推されていることが紹介された。同窓会がどうしたら盛り上がっていくか青木君の情熱にみんなが期待するところである。

2次会は別室で飲み物、つまみ類、参加者のおみやげを持ち込み、はずむ話しは続いた。10時半には一端解散し、後は部屋割りした小部屋で午前様となった。

2日目はバスをチャーターして京都と奈良のお

寺巡りを楽しんだ。人里はなれた岩船寺の本堂では赤い衣の一木造阿弥陀像の前で住職の話の聞き、庭では改修で朱塗りになった三重塔が周辺の深い緑や色づいた茂みに映えて鮮やかであった。そこから道々に通る人の心を和ませてくれる石仏に立ち止まりながら浄瑠璃寺まで当尾の里の散策は「ああ、来て良かった」である。

2日前の雨で林道はしっとり、くっきりで、木の葉の緑はいろいろに、色づく葉っぱもちらほらと、竹林の中の木漏れ日、小鳥の澄んださえずり、ほっとするほど清らかな小川のせせらぎ。国宝の九体阿弥陀如来像や三重塔がある浄瑠璃寺を訪ねた後、その門前にある「あ志び乃店」で手作り自然食材の山菜料理で昼食をとった。

午後は奈良に入り、あまり観光コースには入っていない新薬師寺（新はあたらしいではなく、あらたかの意味だそうで天平時代の建造）を小倉幹

事長お勧めで訪れたが、この日はテレビ撮影に遭遇した。真っ暗な本堂でライトに浮かび出る国宝薬師如来像は厳かな響きを見る人に伝えてきた。この日の映像は来年1月10日午前中に1時間に亘り朝日放送で放映されるという。さらに東大寺（2月堂、金堂…大仏はやっぱり大きかった）、興福寺国宝館を回りお寺参りを終結した。

近鉄奈良駅であわただしく解散しそれぞれに京都、大阪へと名残惜しくも散っていった。

クラス40名が欠けることなく集まれるのが我々の誇りであったが、2年前に残念にも森本（旧姓永吉）郁子さんを失った。残った全員が一層元気に過ごし2年後には米子在住の松本（旧姓門脇）悦子君にお世話願ひ山陰で再会するのが楽しみである。

小倉幹事長には大変お世話になりました。又、機会があればお願いしますよ。



三九会卒後40周年同窓会

藤木由香子（昭39）

卒後40年を記念して、39回生の同窓会をしました。
会場はハウステンボスと学生の時よく行った雲仙
でした。
40年をさかのぼって楽しい3日間を過ごしました。
其のときの模様をご覧ください。

平成16年5月28日3時ハウステンボス内ホテル
ヨーロッパロビー集合で、三九会卒後40周年同窓
会が始まった。参加者男性5名、女性8人。まず
初日の宿泊となる、フォレストヴィラで一息つく。

29日の2時ころから雲仙へと移動する。諫早、
愛野、小浜を経てこの日の宿泊場所雲仙観光ホテ
ルへ。生憎の霧のため視界は利かない。宿近くの
原生沼や地獄を散策して、温泉で汗を流す。新し
いメンバーも加わって歓談に花が咲き、遅くまで
語り合う。30日は濃霧のため仁田峠への有料道路
が閉鎖された為、ホテルで天皇陛下が宿泊された
貴賓室など見せてもらったりしてすごす。予定を
変更して島原経由で帰る者、そのまま諫早経由で
帰るものなどに別れ、解散となる。3日間の長崎
同窓会は楽しい思い出を残す旅となった。



パレスのバラ園



花に囲まれて



宴会もたけなわ



ロビーにて

参加者（男性）：鈴木、開、磯田、野口、棚林、田中、（女性）：山田、高木、副島、田村、貞包、中村、胡田、藤木